

各関係機関団体の長
各病虫害防除員 殿

福岡県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予報第9号（12月）について

このことについて、病虫害発生予報第9号を発表したので送付します。

予報第9号

ミナミキイロアザミウマの防除を徹底しましょう！

冬春ナスで9月中旬以降、ミナミキイロアザミウマが
平年より多く発生しています。

多発生後は防除が困難となるため、早期発見に努めて、
発生初期の防除を徹底して下さい。

薬剤防除に当たっては、散布ムラを避け、異なる系統
の薬剤をローテーション散布しましょう。

なお、薬剤感受性検定結果については当所ホームペー
ジの「病虫害・雑草防除の手引き」IV-3(野菜)のII-5を
参照して下さい。

(ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka/>)



ミナミキイロアザミウマの幼虫(左)と成虫(右)

<予想される向こう1か月の天候（平成23年11月26日～12月25日）>

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は高いでしょう。降水量は平年並で、日照時間は平年並でしょう。

週別の気温は、1週間目は高く、2週間目は平年並か高く、3～4週間目は平年並か高いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	20	30	50
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

(福岡管区気象台 平成23年11月25日発表抜粋)

12月における主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

主な病害虫の発生予報概要

作物名	病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (12月の発生予報)	
		平年比	平年比	前年比
冬春イチゴ	うどんこ病 ハダニ類	やや少 やや多	並 やや多	並 多
冬春ナス	すすかび病 ミナミキイロアザミウマ	やや多 多	やや多 多	多 並
冬春トマト	葉かび病	少	少	並
冬春キュウリ	べと病 うどんこ病	やや多 やや少	やや多 並	やや多 並

作物別発生予報

- 注①：この予報は病害虫防除所の現地調査結果に基づき、情報作成会議を経て作成しています。
 注②：予報の根拠の末尾の()書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示します。

【野菜：冬春イチゴ】

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや少なかった(-)。

発病株率 0.3% (平年 0.5%、前年 0%)

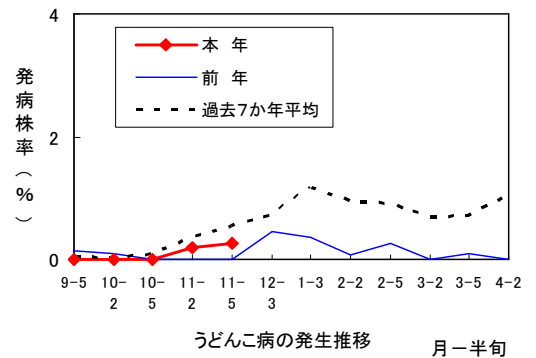
イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)

(3) 防除上の注意

ア 早期発見に努め、下葉かぎ後、葉液が葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

イハウスの換気を行い、湿度の低下を図る。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 ハダニ類

(1) 予報の内容

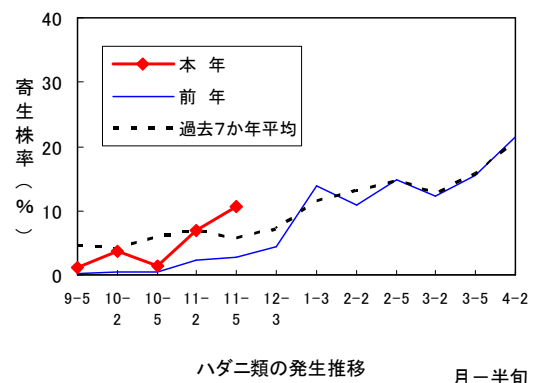
発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)

寄生株率 10.6% (平年 5.9%、前年 2.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より



高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

- ア 本種は、はじめスポット的に発生し、下位葉ほど寄生が多いので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生を認めたら早めに防除を行う。
- イ 防除は摘葉後に行い、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。
- ウ 摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。
- エ カブリダニ類等を放飼しているほ場では、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布する。

【野菜：冬春ナス】

1 すすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多、前年より多

(2) 予報の根拠

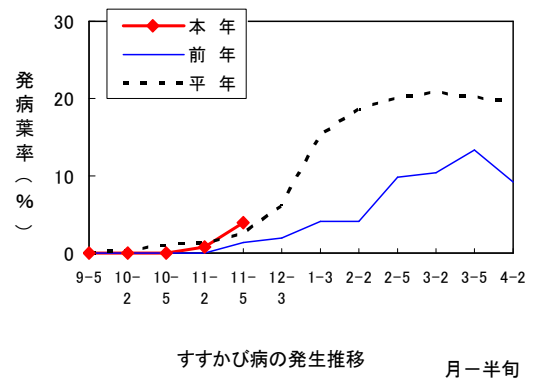
ア 11月5半旬調査の結果、発生量はやや多かった（+）。

発病株率 4.0%（平年 2.5%、前年 1.4%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

- ア 多湿条件下で発病が進展・増加するので、施設内の換気を図る。
- イ 病徴が進展してからでは防除が困難なので、発病初期に防除を徹底する。
- ウ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



2 ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生量：平年より多、前年並み

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査結果、平年より多かった（+）。

寄生葉率 29.8%（平年 14.6%、前年 38.3%）

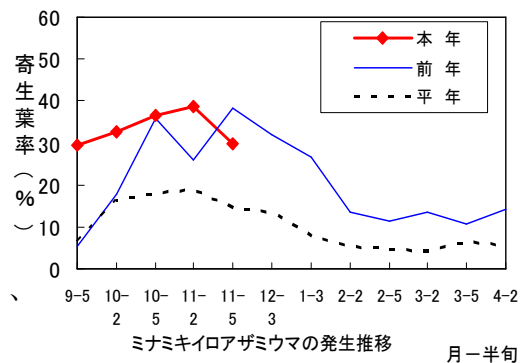
発生ほ場率 100%（平年 75.6%、前年 100%）

被害果率 1.0%（平年 1.0%、前年 2.3%）

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている（+）。

(3) 防除上の注意

- ア 葉裏への寄生が多いので、散布むらがないように丁寧に散布する。
- イ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息・増殖源を絶つ。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



【野菜：冬春トマト】

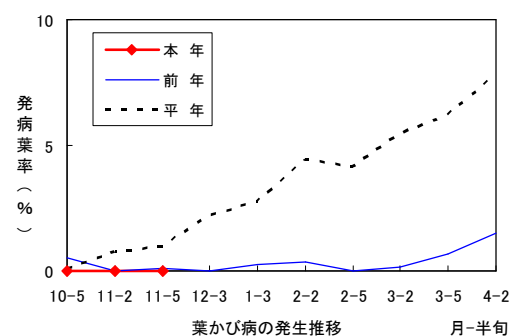
1 葉かび病

(1) 予報の内容

発生量：平年より少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生は認められなかった（-）。



発病葉率 0 % (平年 1.0%、前年 0.1%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 薬剤は葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ ハウスの換気を行い、多湿にならないように管理する。

ウ 肥料切れを起こすと発生しやすくなるので、適正な肥培管理を行う。

エ 抵抗性品種での発生も確認されているので、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、葉かび病の発生に注意する。

【野菜：冬春キュウリ】

1 ベと病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生量は平年よりやや多かった(+)。

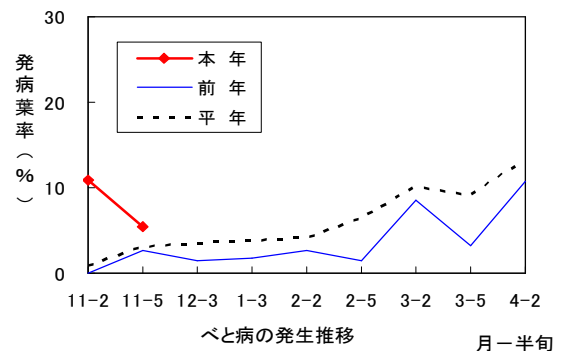
発病葉率 5.5% (平年 3.1%、前年 2.7%)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、初期防除を徹底する。

イ 肥料切れや成り込みによる草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年並み

(2) 予報の根拠

ア 11月5半旬調査の結果、発生は認められなかった(-)。

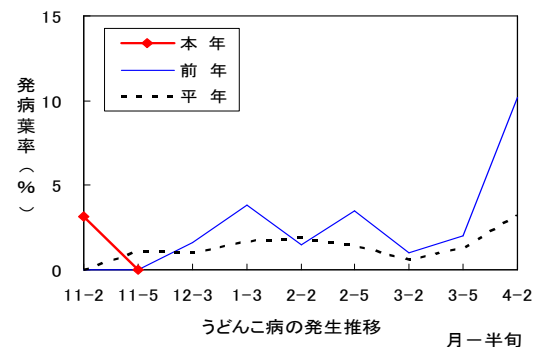
発病葉率 0 % (平年 1.1%、前年 0 %)

イ 向こう1か月の気象予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並とされている(+)。

(3) 防除上の注意

ア 罹病葉はできる限り除去するとともに、葉の裏側にも十分かかるよう丁寧に散布する。

イ 窒素肥料の多用は本病の発生を助長するので、適正な肥培管理を行う。



【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (12月の発生予報)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
冬春イチゴ 灰色かび病	並	並	やや少	・罹病果は見つけ次第除去する。 また、下葉かぎを随時行い、株間の通風を図って湿度を低下させる。
冬春ナス 灰色かび病	並	やや少	並	・罹病葉や罹病果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。
うどんこ病	少	少	並	
コナジラミ類	やや少	やや少	やや少	
冬春トマト 灰色かび病	並	並	並	・開花後の萎れた花卉は、伝染源となるので取り除く。 ・本種は、トマト黄化葉巻病(TYLCV)の媒介虫である。 発病株は、早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出すとともに、本種の防除を徹底する。
コナジラミ類	並	並	並	
冬春キュウリ 灰色かび病	並	並	並	・開花後の萎れた花卉に、灰色のかびを認めたら防除を開始する。 ・初期防除を徹底する。 ・本種は、キュウリ退緑黄化病(CCYV)の媒介虫である。 発病株は、早期に抜き取り、ほ場外へ持ち出すとともに、本種の防除を徹底する。
褐斑病	並	並	並	
ミミキアザミマ	並	並	並	
コナジラミ類	並	並	並	
冬キャベツ 菌核病	並	並	並	・罹病株はただちに抜きとり処分する。 形成された菌核は、ほ場に残さないよう、ほ場の衛生に努める。 ・結球期前の防除を徹底する。
黒腐病	並	並	並	
コナガ	少	やや少	並	
冬レタス 灰色かび病	並	並	並	・トンネル内が過湿にならないように、朝夕に被覆資材の開閉を十分に行い、換気に努める。 ・冬に凍害にあうと被害が激しくなるので、トンネル被覆が遅れないようにする。
菌核病	やや多	やや多	並	
腐敗病	やや少	やや少	並	

農薬の安全・適正使用、飛散防止対策の徹底を！

福岡県では、農薬の安全かつ適正な使用及び保管管理、使用現場における周辺への配慮を周知徹底するとともに、農薬による事故防止を目的として、安全使用講習会の開催や啓発チラシの配布等を関係機関、団体と一体となって取り組んでいます。

使用者の安全はもちろん、人畜・隣接作物・河川等への配慮について、ご指導をお願いします。

1 農薬適正使用の徹底

○適用作物、使用量や濃度、使用時期、総使用回数などが記載されたラベルをよく確認し、使用基準を遵守する。

※農薬の種類によっては、登録の内容がメーカーによって異なるので、ラベルをよく確認する。

(例：スミチオン水和剤40は、メーカーによって適用作物名や適用病害虫名が異なる)

2 飛散防止対策の徹底

○風の弱い時に散布する。

○風向、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

○飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

○散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 保護具の着用

○農薬の散布時には、ラベルの注意・警告マークをよく確認し、マスク、保護メガネ、ゴム手袋等を着用する。

4 農薬の散布後は、必ず散布器具を洗浄

○噴霧器、薬液タンク、ホースなどの散布器具を十分に洗浄する。

5 防除履歴の記帳

○農薬の散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、使用年月日、薬剤名、使用濃度、使用量等を正確に記帳する。

6 空容器の処分

○空容器は、産業廃棄物処理業者に委託するなど、適切な処分を行う。

また、野焼きは法令で禁止されているので行わない。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jppn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jppn.ne.jp